

「光、遊園地に行く」初稿

20240830

エリー



—

目次

1、神崎 光 (かなぎき ひかり)	1
2、水井 等 (みづい ひとし)	3
3、ライン	5
4、図書館	7
5、社 八依 (やしろ やえ)	9
6、招待券	11
7、遊園地	12
8、コーヒーカップ	13
9、ピザ	14
10、立体迷路	16
11、メリーゴーランド	17
12、観覧車	18
13、海	19
14、占い師猫又	20
15、記念日	22
16、誘い	23

1、神崎 光(かんざき ひかり)

その日は朝から雨が降っていた。

校庭のアジサイの葉には、カタツムリが一匹、寂しそうに佇んでいた。

(わたしと同じね)

高校1年の教室に着くと、いくつもおしゃべりのグループができています。

わたしは誰とも話さず、本を読み出す。あのカタツムリのように。

終業チャイムがなる頃、梅雨の曇り空からいく筋の光が差し込んでいた。

ハッとするような美しい光景に思わず見とれた。

バイトがあることを思い出し、手鏡で髪を直す。

真っ黒な姫カットに四角い黒ぶちメガネ。白いシャツに紺のプリーツスカート。見慣れた姿に問題はない。いつもの神崎光(かんざきひかり)だった。

鏡を下げると、クラスメイトの水井等(みずいひとし)が友だちと話している姿が見えた。長めの銀髪に、小柄な体格。白いシャツのボタンを開けた胸元には、銀のネックレスが光っていた。

(水井さんとは、同じクラスであることしか共通点がない。一度も話すことなくクラス替えになりそう)

鏡をしまうため下を向くと、不意に担任の青年教師が大声を出した。

「用務員さんの落とし物だな。届けてくれる人！」

誰も振り向かない。

スマホで予定を確認する。バイトは16時から。今は15時30分。

(10分で終われば間に合うけど.....)

しびれを切らした担任が、いらっとした顔で怒鳴る。

「おい、返事くらいしろよ！」

わたしはすぐに手を上げた。引っ込み思案を直すため、迷ったらやることにしている。

「はい、行きます！」

有無を言わせず受け取る。

「植木のおじさんにとどければいいんですね！」

急いで歩き出した。

気のせいか、水井さんが担任になにかを聞いているような声があった。

たぶん、わたしには関係ない。
振り返ることなく歩き続けた。

2、水井 等(みづい ひとし)

校舎を出て、校門に向かう。

下校する生徒にぶつからないように早足で歩く。

校門を囲む生け垣に着くと、おじいさんがザクザク葉っぱを切っている。

みんな、挨拶していく。

わたしは初めて声をかけた。

「用務員さん、落とし物です」

おじいさんがアゴに手を当てる。

「わしゃあ、ボランティアのじいじなんだわ」

思わず声が出る。

「用務員さんではない？」

うんうん、うなずくおじいさん。

「こう、葉っぱをザクザク切るのがすきでなあ」

ハサミで葉を切って、満面の笑みでVサイン。

固い笑顔を無理して返す。心の中は嵐のように疑問符が渦巻いていた。

(今から校舎に戻るの？ バイト遅刻確定?)

判断に迷っていると聞きなれた声がする。

「俺が用務員室に届けるよ」

振り返ると水井さんが立っている。

「光さん、バイトの日でしょ？」

驚き、うなずく。

(なぜ知っているんだろう?)

聞き返したいのを我慢して強がってみせる。

「ありがとう。でもわたしが引き受けたことだから、わたしが行きます！」

「ちゃんと報告するから安心して。ラインを交換しよう」

水井さんがスマホを差し出す。

(よく知らない男子とこんなことでラインを交換していいの?)

おじいさんが参加してくる。

「安心せい。この子はいいこじゃぞ」

水井さんが、微笑みながら言う。

「信じて」

(迷ってる時間はない!)

うなずき、スマホを差し出す。

「お願いします」

ラインを交換して、落とし物を渡す。

「任せて」

頭を下げて、わたしは走り出す。

振り向くと、校舎に戻る水井さんの後ろ姿が見えた。

3、ライン

バイトは、厨房での盛り付け。
店内は満席らしい。ひっきりなしに注文が入る。
ポテサラを盛りつけていたら、お腹が鳴ってしまう。
いつもならバイト前にクッキーを食べる。今日はギリギリだったので、何も食べてない。
恥ずかしそうに周りを見回す。みんな黙々と働いている。
ほっとして盛り付けに集中する。

シフトは週1で16時から20時まで。バイトの日はカレーライスと決まっている。レンジで温め、一人でバクバク食べる。

「ふー。生き返った！」

スマホを取り出し、ラインを開く。
水井さんからメッセージ2件。
1件目は用務員さんとのツーショット写真。
2件目は「届きました！」のメッセージ。
急いで「ありがとうございます」と返す。
写真を拡大して水井さんの顔を見る。
(よく見るとフランス人形みたい。瞳がきれい)

水を汲んで飲む。
(ちゃんと報告してくれたり、コミュ力高い人なのね。どうりでいつも友だちに囲まれてるはず)

コップとお皿を洗う。
(明日、改めてお礼を言わなくちゃ)
うきうきしている自分に気づいて、驚きを隠せない。

翌朝、雨の中を登校する。校庭のアジサイの葉には2匹のカタツムリが仲良く並んでいた。

(わたしたちはそんなんじゃないけど)
教室に入ると水井さんは友だちと話している。
(割り込んでお礼をいうのはおかしいよね。後にしよ)

始業のチャイムが鳴る。

昼休み、窓の外をのぞく。

水井さんが校庭で友だちとサッカーをして遊んでいる。

(一人にならないな)

水井さんがゴールを決める。

自然とにっこりする。そんな自分に赤くなる。

終業チャイム鳴る。

振り向くと水井さんが一人にいる。

(今だ！)

近づこうとすると、友だちが割り込んで水井さんに話しかける。

(いつも一人で行動しているから、人に声をかけるタイミングがつかめない)

胸元で右手を握りしめる。ため息をついて、背を向けた。

荷物を持って一人で教室を出ていく。

4、図書館

図書館に着くと一番奥の窓際の席に座る。
宿題をしていると隣に人が座った気配がする。
顔をあげる。

(水井さん!?)

互いに軽く会釈する。

(図書室では話せない。どうしよう)

気になって水井さんを見ると、視線に気づいて微笑み返してくる。ドキッとしてしまう。

(写真を見てきれいと思ったことはばれてないはず)

いつまでも隣にいたいような、早く帰りたいような、矛盾した気持ちに混乱しながら宿題を終える。

わたしが片付け始めると、水井さんも片付け始める。そして一緒に席を立つ。

二人とも下駄箱で靴に履き替える。

わたしは160センチ。

水井さんはほぼ同じくらい。2センチくらい高いかも？

目線が合う。

「昨日は助かりました。ありがとう」

「お役に立てて嬉しいです。光さんはいつも図書室で勉強しているの？」

大人みたいな返事。こちらに負担をかけない。ホントにコミュ力高い。

「バイトのない日はそうです。家だと誘惑が多いから」

「そうだね。俺も明日から隣で勉強するよ」

(え!?! なんと言えればいいの?)

答えが見つからないまま、なんとなく一緒に歩き出す。

歩道を並んで歩く。水井さんが背伸びをしながら言う。

「宿題終わったし、今夜はゆっくりできそう」

「いつも寝る前にしていたの？」

振り向くと水井さんがうなずく。

「そう。きりぎりまで友だちと遊んで、半分寝ながらやってた」

(今日は友だちはいいのかしら?)

水井さんが立ち止まる。

「俺、こっちなんで。また明日！」

「また明日」

しばし見送り、歩き出す。

(わたしのこと好きなのかしら?)

首を横に振る。

夜、自室のベッドに入る。

スマホをおいて、電気を消すと通知音が鳴る。

暗闇の中、スマホを開くと水井さんからのライン。

「話せて楽しかったよ。おやすみ」

「わたしもです。おやすみ」

すぐに返事を返す。

(楽しかった言われると安心する。ほんとコミュ力高い)

にっこり笑って目を閉じる。

5、社 八依(やしろ やえ)

初めて図書館で水井さんと宿題をした夜、わたしは幼稚園のころの夢を見た。

居間でブロックを出して遊んでいた。

玄関チャイムが鳴り、同じ幼稚園に通う社 八依(やしろ やえ)とその母親が現れる。

八依ちゃんは黙ってブロックに近づいてくる。

「一緒に遊ぶ？」

わたしが声をかけても八依ちゃんは無言。無反応でブロックを組み立て出す。

八依ちゃんの母親がかわりに答える。

「光ちゃん、こんにちは。八依と遊んであげてね」

「はい」

しゃべらず、無反応な八依ちゃんが、わたしは苦手だった。何を考えているか分からず、不安になる。耐えきれずに助けを求めて母を探す。

台所を覗くと、八依ちゃんの母親が泣いている。

わたしの母が背中をさすっている。

見てはいけない気がして、黙って居間に戻った。

そしてブロックでお城を完成させる。

「見て見て！」

八依ちゃんは知らん顔で小さな人形を作って遊んでいる。

「お人形？ かわいいね」

八依ちゃんはわたしを無視して遊び続ける。

(来たくないのに無理矢理連れてこられたのかな?)

早く帰ってほしかった。そんな自分が意地悪に思えて泣きたくなった。

台所に行くと八依ちゃんの母親がまだ泣いてる。

「ママ、お城できたの見て！」

「あとでね」

つまらなさそうに居間に戻る。

夜になりやっと帰った。

母親が急いでごはんの支度をしている。
「八依ちゃん、光と遊びたくないんだと思う」
「光はどうなの？」
悩んだ末に本当の気持ちを打ち明けた。
「なに考えているか分かんないから怖い。明日もくるなら公園に遊びに行っていていい？」
母は、一瞬困った顔をした。しかしすぐに笑顔に戻る。
「いいよ」
わたしはすごくホッとした。

夢から目を覚ますと外はまだ暗い。
(八依ちゃんは知らない間に引っ越してしまった)
布団に起き上がり、額を押さえる。
(その後できた友だちも、誘えば無理矢理付き合ってくれる)
目から涙が一粒こぼれる。
(つまらないのを我慢させるくらいなら一人がいい)
スマホを開く。
(でも等さんは、話せて楽しかったと言ってくれた)
スマホをぎゅっと抱きしめる。

6、招待券

彼は教室では話しかけてこない。図書館や帰り道、二人になると話しかけてくる。
大勢で話すのは苦手なので、その方がよかった。
本当に彼は図書館で宿題をするようになる。
「光(ひかり)さん」と名前と呼ぶので、わたしも「等(ひとし)さん」と呼ぶようになる。
そして一学期最後の日も、一緒に下校する。
けれども「夏休みに会いたい」と言えなくて、あと数分でさよならすることを寂しく感じていた。
不意に等さんが立ち止まる。紙を2枚取り出す。
「遊園地の招待券をもらったんだけど、一緒にいかない？」
光「え!？」
相手から誘ってくれたのが初めてだからわたしは驚きの声をあげる。
(等さんも夏休みにわたしと会いたいんだ！)
嬉しくてにっこり微笑む。
手を振りながら等さんが去る。
「行ける日ラインして」
「はい！」
わたしは喜びで胸がいっぱいになり、遠ざかる等さんの背中をしばらく見ていた。

家に着くと、自室で勉強机に座り、手帳とにらめっこする。
紙に予定を書き出す。
(デートなのかな？ ただの友だちなのかな？ 好かれてはいるだろうけど……)
ラインに日付を入力する。
(遊園地に行けば分かるはず)
メッセージを送信する。
すぐに返信が来て、一番早い日の午前10時にゲート前で待ち合わせに決まる。
(決断が早い。仕事できそう)
遊園地のリンクも送られてくる。どんなアトラクションがあるかワクワクしながら眺める。

7、遊園地

遊園地は、海のそばの湖のほとりにある。景色が自慢で、巨大な観覧車が有名。

広い園内を動きやすいように濃い水色の半袖シャツに、濃い青色のキュロットスカートを選んだ。

等さんは、真っ赤なTシャツに、青いジーンズ。

(下の色がお揃い！ 知らない人が見たら恋人にみえるかしら?)

ひとりで照れて赤くなってしまう。

入場料は遊園地のチケットで無料。乗り物や食事はその都度払う。

(バイト代は本に使いたい。でもせっかく来たし、いくら乗り物券を買おう?)

迷っていたら、等さんが1500円分のチケットを買って渡してくれる。

「おごってもらうわけにはいきません！」

「俺が誘ったんだから、俺が払うよ」

「でも……」

もじもじしていると話題を変えられてしまう。

「何に乗ろうか？」

何があるか調べたから知っている。

(乗り物券を買ってもらった上に、乗りたいものを言っているのかな?)

困っているとびっくりされる。

「光さんの顔が見たいからコーヒーカップによう！」

「え？ はい！」

反射的に答えてしまう。

(顔が見たいってどういうこと?)

心を落ち着けるために横を向く。片隅に「猫又のイエスノー占い1回100円」の張り紙がある。

(遊園地で占い！？ 楽しみに来た人が悩みを相談するかしら?)

一瞬、疑問に思う。

「行こうか？」

等さんの後を追って歩き出した瞬間、占いのことは忘れてしまう。

8、コーヒーカップ

子どもからお年寄りまで、いろんな人がコーヒーカップに並んでいる。
(コーヒーカップって見つめ合うために乗るもの?)
戸惑いの中、入場が始まる。
わたしを先にカップに座らせて、あとから等さんが座る。
対面した等さんはすごくきれい。思ったことが伝わりそうで恥ずかしくなる。
うつむき、たまに顔をあげる。等さんがこちらを見ていてにっこりする。ドキッと
して横を向く。
「横顔もかわいいね」
またまたビックリして振り返る。等さんの真面目な顔に驚く。
(本気で言っているのかしら?)
「等さんもかっこいい」と言おうとして思いとどまる。
(それでは自分をかわいいと認めたみたいでは?)
回転するコーヒーカップのように葛藤する。
言いたそうで言わないでいると等さんが言い当てる。
「言いたいことがあるなら言ってね」
「等さんの方がきれいだと思う」
等さんがウインクしてくる。
「俺ら美男美女だね」
あたふたする。
(けなされるよりいいけど、恥ずかしい)
等「行こうか」
手を差し出され、勢いで思わず繋いでしまう。
(恋愛の好きなのかな?)
期待でどきどきする。

9、ピザ

手を繋いで歩いているとフードコートの前に出る。早い時間なのでまだ空いている。

「混む前に昼ご飯食べちゃおう。お腹空いてる？」

「はい！」

中に入るとピザやサラダなどファストフードメニューが並んでいる。

「サラダ2つと飲み物2つとピザLをわけるでいい？」

「はい、今度はわたしが払います！」

財布を出す。

「気持ちだけ受け取っておくよ」

電子マネーで等さんがピッと支払う。

品物を彼が運び、二人席に向い合わせで座る。サラダと飲みものを渡してくれる。

「ありがとう」

等さんもわたしも、最初にフォークでサラダを食べる。

「やっぱり光さんも野菜から食べるんだね」

「ええ」

二人ともやせ形なだけあると思う。

(少しでも役にたちたい。そうだ、ピザを取り分けよう！)

「あ！」

真ん中で分けたら、隣の具がチーズと一緒についてきてしまう。

(どうしよう!?)

動けず固まってしまう。

「フォーク借りるよ」

わたしのフォークを取り、等さんが具を戻す。そしてフォークの触れたピザを食べ始める。

(間接キス!?)

気づかないふりで光も食べ始める。

(使ったフォークが嫌でないのは好きだから?)

考えすぎてピザの味が分からない。

(友だちでも一緒に鍋を食べるもの普通よ)

手をふき、光がアイスレモンティーを飲む。

「そっちは紅茶だっけ？ 俺のアイスコーヒーと交換する？」

等がカップを差し出してくる。

(それは完璧に間接キスでは!?)

勢いに負けて交換する。

「甘酸っぱくていい香り。光さんみたいだね」

等さんのコーヒーを飲む。

「等さんはブラックって感じじゃないかな。優しいもの」

「だよ。俺、ちっちゃいし、あまあまカフェオレってイメージでしょ？」

言い方がかわいくて思わず吹き出す。

「ぷっ」

「俺、かわいい？」

素直にうなづく。

「ええ、とっても」

「かわいい同士だね」

だんだんべた褒めのノリに慣れて、素直にうなづく。

10、立体迷路

フードコートを出て歩いていると立体迷路が見えてくる。

「景品はなんだろうね？」

入り口に5種類の小鳥のフィギュアが飾ってある。

わたしは興奮して思わず叫ぶ。

「全部ほしい！」

「二人で協力すればいけるよ」

等さんが耳打ちしてくる。

スピード勝負の4つをわたしが取り、なかなか開かない1つを等さんが取る作戦に決まる。

わたしは走り回って4つの宝箱を開けて、赤、青、緑、黄色のコインを手に入れ、外に出た。

制限時間1分前に等さんが金色のコインを持って出てきた。

「やったー！」

わたしは思わず叫んで、等さんに抱きついた。

うきうきでコインを景品と交換してもらおう。5つのフィギュアを手にしたわたしは、最高の気分。

「難しい方を等さんが取ってくれたから。ありがとう」

「4つ回った光さんの方が大変だったでしょ？ おつかれさま」

改めてフィギュアを見る。

「このシリーズ、前からほしかったの！」

「友だちなら協力するのは当然！」

わたしは思わずフィギュアを落としそうになる。

(友だち？)

うつむき、黙り込んでしまう。

繋いだ手のぬくもりが切ない。

(こんなに近くにいるのに、遠くを感じる)

今すぐ家に帰りたくなる。

11、メリーゴーランド

気がついたらメリーゴーランドの前に来ていた。
グルグル回転する木馬を見て、自分の心のように思う。
(すごく楽しみにしていたのに、今は乗りたくない)
複雑な気持ちで眺めていると等さんが聞いてくる。
「乗りたいの？」
「別に」
わたしの手首をつかみ、等さんが歩き出す。
「俺、乗りたい。行こう！」
引っ張られてついていく。
順番がくるとわたしは木馬に乗ろうとする。
「二人で来たんだからこっちでしょ！」
等さんが馬車に乗り込み手招きしている。
(そうだよね。友だちなら一緒に乗るもんね)
木馬から降りて等さんの隣に座る。
動き出すメリーゴーランド。
等さんがスマホを出して自撮りする。
「光さん、笑って！」
無理して笑顔を作る。
シャッター音が鳴る。
メリーゴーランドを降りたわたしは、「帰りたい」と言おうか悩む。
「最後に大観覧車に乗ろうよ」
(それで帰れるならいいかな)
うなずく。

12、観覧車

赤くなりかけた空に、観覧車がそびえたっている。

二人とも黙って並んでいる。

(わたし、あんなに嫌だった八依ちゃんと同じことしてる。最低だ)

順番が来て一緒に乗り込む。

あんなにわたしを見つめてきたのに、等さんはずっと景色を見ている。

(わたしが不機嫌だから?)

表情は見えない。後ろ姿を見つめる。

(わたしと来てもつまらなかったかしら?)

笑い合った瞬間を思い出す。

(まだ友だちという意味かもしれないのに、こんな態度最低だ)

膝の上で拳を握りしめ、光は泣きそうなのを我慢している。

(そういえば等さんがわたしを好きかばかり気にしてたけど、わたしは等さんが好きな?)

後ろ姿を見つめて自問する。

(分からない。ピンチを助けられて、一緒に勉強しただけなもの。何も知らない)

うつむく。

(一人で浮かれてバカみたい)

光の両目から涙が一粒落ちる。

13、海

観覧車が頂点に達した時、景色を見ていた等さんが振り返る。

わたしは必死に涙を隠す。

「どうかしたの？」

「目にほこりが入ったの」

顔を近づけてくる。

「取れたから大丈夫！」

間近に迫った瞳にきゅんとする。

(わたし、たぶん、等さんが好き。でも彼にとっては友だちでしかない)

横を向くと、等さんが肩に手を置く。

「見て。海だよ」

光が顔を上げると湖の向こうに太平洋が広がっている。

夕日に赤く染まり、キラキラと輝いてとても綺麗。

等さんが海を指して言う。

「今度は一緒に海水浴に行きたいな」

素直になれない光は強がりと言う。

「わたしはなんでもひとりで行動してきたから分からない」

びっくり顔の等を見て、光は切なくなる。

(否定されることを恐れて、素直になれない自分に腹が立つ)

膝を拳で叩く。

(わたしの意気地無し)

地上に着くと「占い師猫又」のポスターが目に入る。

「記念にわたしたちの相性を占ってみない？」

「いいね。行こう」

繋いだ手を離せずに、「よい」と言ってくれることを祈る。

14、占い師猫又

半分藍色に染まった空の下、キャットハウスのような白い建物にたどり着く。
入り口には「占い師猫又のイエスノー占い1回100円」のポスター。
中に入ると猫耳のカチューシャをした中年の女性が机を挟んで座っていた。
「どうぞ、座ってにゃん。何を占うにゃ？」
おどけた口ぶりに当たるのか不安になる。
「彼とわたしの相性を見てください。できますか？」
「タロットのエーススプレッドでパーセントを占うにゃん」
占い師は、カードをシャッフルして、山を三つ作った。
占い師から見て右側を指す。
「過去はペンタクル5逆。一時的なよい兆し」
続いて真ん中を指す。
「今はワンドエース正。付き合いに夢中になる」
最後に左側を指す。
「未来はペンタクルエース逆。勢いではじまった恋」
等さんとわたしは顔を見合わせる。いいのか、悪いのか、分からない。
「出てないのはソードとカップ。付き合う理由と気持ちがあやふや」
エース2枚を指す占い師。
「相性は50%くらい」
ペンタクル5逆を指す占い師。
「出オチ感があるというか、一緒にいるのはいいけど、きちんと気持ちを伝えないとダメよ」
気がつくとうわたしはうんうんと何度も首を縦に振っていた。
用意していた100円渡す。
「ありがとうございました」
ちょっとだけ勇気が出た。

繋いだ手を前後に揺らしながら、出口に向かって歩く。
「わかるような、分からないような結果だったね」
「そうだね」
わたしは立ち止まった。
振り返る等さん。

「わたし、どうやってひとりで過ごしてきたのか、忘れちゃったみたい」

「僕がいるから大丈夫」

何度もうなずく。

繋いだ手を軽く握ると、等さんも握り返してきた。

15、記念日

家に帰るとカレーが用意されていた。お腹が空いていることに突然気づいて、夢中で食べた。

それから急いで風呂に入る。

湯船につかるとニヤニヤしてしまう。

繋いだ手を見て、頬に当てる。

風呂からでて、髪をふきながら、麦茶を飲んでいると母親が来る。

「初デートどうだったの？」

「そんなんじゃないよ。友だちだもん」

ハッとする。

(友だちとわたしもいうわ。意味なんてなかったのね！)

楽しそうに部屋に去る。

パジャマ姿で、机に向かう。

手帳の月間表に「等さんと初デート記念日」と書き込む。

16、誘い

自室のベッドの上で、メッセージを打っては消している。

通知音が鳴り、ビクッとする。

メリーゴーランドのツーショット写真。

「楽しかったです。また行こうね」とメッセージが届く。

「わたしも楽しかったです。また行きたいです」とすぐを送る。

スマホを胸に当てる。

(明日、図書館に誘いたいな。でも……)

とりあえずメッセージを打ち込む。「明日、一緒に図書館で宿題しませんか？」

送信ボタンにあと1ミリで迷っていると母の声がする。

「まだ起きているの？」

驚いて押してしまう。

「あ！」

心臓がドキドキする。

通知音。「俺も誘おうと思っていた。誘ってくれて嬉しい」と返る。

「よし！」

思わず枕を抱きしめる。

翌朝、制服を着たわたしは、ニッコニコで図書館に向かう。

「光、遊園地に行く」初稿20240830

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
